

子どもと女性の  
健康相談室

66



福島医大付属病院小児外科教授

田中 秀明氏

肥厚性幽門狭窄（きょうさく）症は、赤ちゃんに嘔水のような嘔吐（おと）をさせる病気です。幽門（ゆうもん）と呼ばれる胃の出口の筋肉が厚くなることで、飲んだミルクが胃から先の腸へ通りにくくなります。イメージは【図】の通りです。

通常や環境因子など複数の要因が考えられてはいますが、原因は解明されていません。多くは生まれて三週から六週目の時期に症状が出ます。授乳のたびに嘔水のように多量に吐き、吐いた後も空腹感でミルクを欲しがります。嘔吐が続くと脱水症が進行しますので早急に治療が必要になります。

一方で硫酸アトロピンという薬がこの病気に効果があることが分かってきました。異常な筋肉を緩ませることができ、最初は点滴で数日投与し、ミルクが飲めるようになれば退院できますが、外来でも内服薬として継続します。この治療の利点は手術のリスクを回避できることですが、

# 手術か投薬で治療を

治療や環境因子など複数の要因が考えられては

ような大きさの硬い腫瘍

（しゅりゅう）が触れる

こともあります。診断に

は腹部超音波検査が多く使われ、幽門の筋肉が

正常よりも長い距離にわたり厚くなっているのが見られれば確定します。

## 赤ちゃんの多量の嘔吐

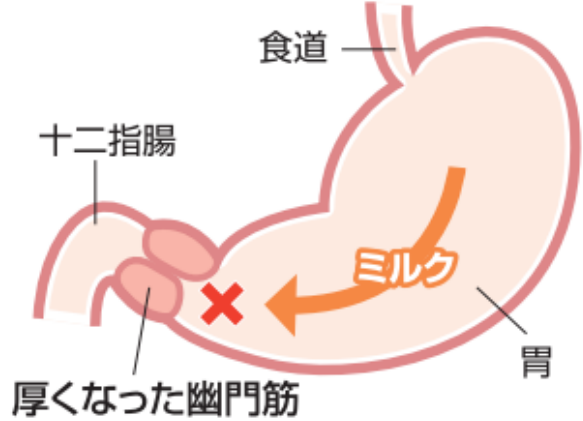
この病気は出生千人あたり一〜二人の頻度でみられ、男児の発症が女児の約五倍、また第一子に多いことが知られています。診察では、みぞおちの下あたりでオリブの

しておなかを開き、病的な筋肉を切開するという症（出血、感染、腸に穴が開くなど）のリスクもゼロではありませんが極めて低く、安全な手術と

薬の副作用（脈拍の増加、顔が赤くなるなど）の心配や治療期間が週単位でかかるため、見方によってはこれが欠点といえます。手術の効果は100%であるのに対し、この薬の有効率は八割弱であり、効かない場合はやはり手術が必要です。

この病気が判明した際は、薬と手術の両方の治療法について主治医とよく話し合い、選択されるのが良いでしょう。

〈肥厚性幽門狭窄症のイメージ〉



ふくしま子ども・女性医療支援センター

<http://www.fmu.ac.jp/home/fmccw/>

次回10月18日掲載